
嫌われ主人公の幸せ探し

天音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

嫌われ主人公の幸せ探し

【NZコード】

N48160

【作者名】

天音

【あらすじ】

ある日、僕は両親に言われた。
「お前は、誰からも愛されない」
その日から、僕は一人になつた。そして、それから12年後、僕はある口リツ子によつてある世界へ落とされた。

予告

人に好かれるって何だろう、人に愛されるって何だろう。

人を好きになるってどんなだろう、人を愛するってどんなだろう。

分からぬ事だらけのこの人生、好かれも、愛されもしなかつたこの人生。

もう、いやなんだ、誰からも好かれず、愛されず、ただただ、平凡で退屈な日常を生き続けるだけの人生は。

誰か、誰でもいい、この際人間じゃなくても動物でも、それ以外で

もいい。

誰か、ボクを好きになつてください。

誰か、ボクを愛してください。

「お前を、助けに来た！」

小さな口っこ子がそつまつた。

「今まで誰からも愛されなかつたならこれから愛されればいい。

今まで誰からも好かれなかつたならこれから好かれればいい。」

小さなロリッ子がボクの頬を撫でながらそう言つた。

「お前は聞いたな、お前は何者で何でここにいるかと。」

答えよつ。

私は幻想郷。

お前を、助けに来了！」

コレがボクと、小さな閉鎖された世界との出会い。
運命なんて薄つぺらな言葉ではない、必然なんてありもしない現象
でもない。出会いと言つ名の始まりの物語。

ボクはその日、一人ではなくなつた。

だから、もう下を向くのは止めようと思つ。

上は無理でも、前を向こう。

前が駄目なら、目を閉じよう。

ボクを好きだと言ってくれた彼女の笑顔があれば、ボクは・・・・・

さあ、嫌われ主人公の幸せ探しの開幕だ。

あの日、ボクの両親はこう言った。

「お前は、この先誰にも愛されない」

最初は意味も分からず、ただ、ああこの人達はもう他人何だと思つた事をボクは覚えている。

あの日、ボクと両親だった人達が他人になつた日から、12年が過ぎた。

そんな過去を持つボクだ、精神がイッてると思われても仕方ないと
思つ。実際、ボクの自分に対する認識だつて「精神に異常のある少
々妄想癖のある美少年」だ。あ、美少年の部分は譲らない、何せボ
クの姿は自他共に認めるイケメンだから。

そんなボクでも、妄想癖のあるボクでも、今の状況は否定したい。

「…………」

「…………」

学校へと行く途中、家を出てすぐの道路に横たわる一人の少女。背
丈は小学生ぐらい、髪が銀色で膝ぐらいまであり、白衣マントのよ
うな物を来てている少女、うつ伏せで寝てているため分からなが、ボ
クの美少女センサーがつげている、彼女は間違いなく美少女だ！！

「…………」

さてそろそろ落ち着いてきた。ではどうする？

- 1、家に連れ込む
- 2、ベッドへ連れ込む
- 3、・・・・・ヤル？

「あ、もうこんな時間か。学校へ急がないと」「ちよつと待てえ！……」「ここまで来てスルーですか…」

勢いよく飛び起きた少女はボクに詰め寄つてそのままぶ、いや、起きてこらねーいか。んじゃ。

「あ、ちよつながら」

「え、あ、はい、ちよつながらって違うっ！このやり取り違う…もつ

とこー、私の手を握つて、大丈夫ですか？…ぐらり言いなさいよ…」「無理」

「即答ですか」のヤロー…！」

何やら愉快な少女だ。

少女はボクの予想通り美少女だったし、これで心残りはない！

「では！」

「うむ！…しつかり学校へつて、いい加減にしろよ？私にも我慢の限界があるんだぞ？」

「そんな、怖い顔しちゃ、ダ・メ・ダ・ゾッ」

「無表情でとかつけるなあ！…！」

「してやがなーのロコッちや、じーじー一つ黙らせるか。

「オイガキ」
「ビクシー」

ビクシー！つて自分で言つたよこの子、やつべー天然記念物もんじやねえ？ウケルンデスケドー。

「何故だ、今無性にお前を殴りたいんだが」「あア！？んだとこのガキがアー！テメエが何者で何でここにいんのか早く言いやがれ！」「ひーーー無表情で凄まれてもいまいち反応に困るがー！」は怖がつておへーーー！」

はい、ありがとー、やいまーす。
んじや、わろそろ行つていいかな。

「ムツーーー！へ行く氣だ！」

「学校だよ、コレでもボクは優等生でね

「誰にも好かれないのに学校へ行くのか？」

・・・・・

「ふむ、随分とお前は我慢強いのだな。誰にも愛されず、好かれず、ただただ、孤独で退屈な世界で一人生き、そして死んで行くのだな」

「いやなに、唯の美しいロリッ子の戯言だ、気にするな嫌われ者」

• • • • •

1

で? こ^の首^を絞^{める}る[」]の手^は何^だ?」

気がつけばボクは口リツ子の首を絞めていた。

舌の息が止まらず 心臓の音が止まらず 脳内で再生される声が止まらない。

でも、向よつもつむれこのま。

「知ったような口を開く、お前が一番つるさー」

このまま殺せばボクは犯罪者か？いいだらう、どうせ嫌われるなら全世界から嫌われよう。その方がオモシロイ。

「ほお、それがお前の本質か？」

「ホンシツ？知らないなあ、ボクはただ、自分のした事を自分でするだけだよ。それの何が悪い？悪い事なんてどこにもない、そう、どこにもないんだよ。だつてボクの人生だ、ボクがどうしようとかつて勝手だろ？」

「そうだな、それはお前の勝手だ。だが、その勝手に他の者を巻き込むな」

「ボクの勝手だ」

「分からん奴だなあ。お前の人生、お前がしたいようにすればいい。だが私がいつ死にたいと言つた？殺されてもいいと言つた、それは貴様の勝手な解釈で、勝手以前の問題だ」

「うるさいなあ。本当にうるさい。でも、いいか、どうせすぐに鳴けなくなる」

「所詮、貴様もお前の親と同じと言つ事か？」

「ツー？」

ボクが、アレと、同じ？

面白い事を言つたこの口リッ子は。

「オイロリッ子、ボクとアレのどこが同じだって言つんだ」「どう見ても同じだろうが。勝手に解釈し勝手に付き離し、勝手にどこかへ消え死んだ。お前と同じ、勝手ばかりの愚者だ」

「

「何故そこまで自分を落とす？愛されないからか？好かれないからか？」

「

なら、どうすればいい

頑張ってきた、これまで、何度も、死ぬ気で。

ある子は親に内緒で猫を育てていた、しかし、その猫が車に轢かれそうになり、悲鳴をあげていた。それを偶然通りかかったボクが助けた。

にもかかわらず彼女はボクを一瞥するだけで逃げて行つた。

ボクはどうすればいい？ボクの全てをかけても、ボクの精一杯をかけても、誰もボクを見てくれない必要としてくれない。なら、どうすればいい？

ふつと、ボクの頬に温かい何かが触れた。顔を上げると、ロリッ子がボクの頬を撫でていた。

「お前は偉いな、一人で、誰にも頼らず、よくここまで生きてきた。何度も絶望した、何度も悲観した。でも、一度も泣かなかつた」

「

「お前は偉いな。だが、もう大丈夫だ。

お前は聞いたな、お前は何者で何でここにいるかと。

答えよう。

私は幻想郷。

お前を、助けに来た！」

コレが、ボクの始まり。

誰からも愛されず、好かれず、ただただ平凡で退屈な毎日を過ごしていただけの。そこには何もない時間を過ごしてきた、ボクの始まり。

「今まで誰からも愛されなかつたならこれから愛されねばいい。
今まで誰からも好かれなかつたならこれから好かれねばいい。

私はその手助けを少しする事しかできない。だが、忘れるな！お前
はもう一人ではないぞ！お前を一番に愛したのはこの私だ！お前を
一番に好いたのはこの私だ！他でもない、幻想郷というな世界だ
！故に胸を張れ！前に進め！今日が無理なら明日へ希望を、明日が
無理なら明後日へ希望を繋いでいけ！

「あ、賽は投げられた！導こう、お前の新しい世界、我が内へ！…」

同時に意識が遠のいていく、視界が真っ暗に閉ざされ、意識を失う
瞬間、ボクの耳にはちゃんと届いたロリッ子の声。

「どうか、私がお前の理想郷になる事を願う。その時、また会おう、
我が愛しき山撫椿」

こうしてボク、山撫椿は、ロリッ子の中へと入つて行つた。

いや、改めて考えると、なんか口悪いな。

「ふんつー。
グハッ！」

嫌われ主人公とロリッ子（後書き）

とりあえず一話目です、え？もう一つの方はどうした？書きますよ、大丈夫です、書いて、見せます。

嫌われ主人公の紹介

山撫 椿

本作の主人公。生まれてすぐに両親から存在を否定され感情が消えた少年。

そのため、どんなに面白い話をされても無表情、言葉では笑っているが顔は無表情と、鉄の仮面を持っている（ちなみにくすぐられても全く笑わない、本人はくすぐったいからやめろと言うが）。

自他共に認める美少年、たまに女と間違われる事がある。一部では椿姫という名前が広がっているらしい。

趣味は筋トレ、スポーツ観戦、格闘技観戦。格闘技が好きで、真似をしていくうちにいろいろ出来るようになつた。

性別：男

年齢：17歳

容姿：髪は黒く肩を隠すぐらいの長さはある、顔立ちは整っているが、前髪で田元を隠しているため、あまり気付かれないが激しい運動をするときは前髪をピンで止めるため、その際イケメンだとバレる。

特技：格闘技（アニメ、漫画、ゲームの技を真似る事も出来る）

何故か素手で岩が壊せる（鍛え過ぎた）

足が異様に早く車と同じぐらいの早さで走れる（鍛え過ぎた）

工作（家にある家具は全部ボクの作）

能力

書き換える程度の能力：簡単に言つとあつた事やあるはずの事を書き換えること、世界の修正が出来る。理由は幻想郷に愛されているから。云わば幻想郷の能力。

見切る程度の能力：どんな力、現象でも見切る能力。

何か一言

「え？ ボク？ 何で」

え、あ、いや、その。

「どうせ行を稼ぎたいんでしょう？ いいじゃない、これで終わらせれば」

いや、そう言つわけにもいかないんで。

「それは君の都合だろう？ ボクには関係ないよね？」

お願いします！ せめて、せめて何か一言！

「えー・・・・・・終わり」

本当にひとことだけじゃねえかー！！！！

「これからもう1つの小説よろしくお願ひします」

嫌われ主人公の紹介（後書き）

よろしくお願いします！

嫌われ主人公と巫女ロリ

気がつくとボクは布団で寝ていた、寝起きでいまいち思考が定まらない頭でこれまでの事を思い出す。

「（確かにロリッ子に告白されても、なんかエロい展開になつて……）

さて、ここまでは思い出したが、まさかの夢オチか？いやいや、ボクはベッドで寝るから布団はないはずだ。
そこで襖が開いた。

「あつー田が覚めたんだ！」

ロリッ子がいた、だが唯のロリッ子ではない、巫女服を着たロリッ子だ。この時点でボクのテンションは急上昇！パネエ、マジパネエよ巫女ロリ。

「ん？ どーしたの？」
「いや、何でもないよ」

おつとボクとした事が、目の前にいる背名の神秘に心を奪われてしまつていたようだ。ふつ、ボクもまだまだ、と言つ事か。

「うーん? 何かお兄ちゃんが悟つた顔になつてる」

「……さて巫女ロリ、ここはどこか教えてくれるかな?」

「うあえずは現状を把握しなくては
口に来る前にロリッ子が言つてたな、えつと、なんだっけ……
げ・・・・・げ・・・・・ああ――」

「「」」は幻想郷か(だよ)」

「つて、知つてるの!?」

「口に来る前にそんな事を言つていた奴がいたのを思い出してね

「ふうー、お兄ちゃんイジワルだ」

頬をふくうーと膨らませる巫女ロリ、可愛いなあ、おつと勘違いしないでほしいボクは消してロリコンではない。そんな事を思いながら巫女ロリの頭を撫でる。

「「」めんね
「むー・・・・・えへへ
「ぐはつー」
「お兄ちゃん!-?」

クッ！」「これほどの力を持つているとは・・・！」
巫女口り、なんて恐ろしい属性なんだ！－！

口元の血を拭い、改めて巫女口りに聞く。

「えっと、君がボクを助けてくれたのかな」

「うん、うちの前にたおれてたのを、私が運んであげたの－」

・・・・・どこか嬉しそうに言つ巫女口りに、ボクは一瞬言葉を出せなかつた。だけどすぐに元に戻り、ボクは一言言つ。

「ありがとう」

「えへへえ～」

嬉しそうに笑う巫女口り、そんな巫女口りの頭を撫でていると、身を乗り出し、輝く目でボクに言つ。

「ねえ！お兄ちゃん外から来たんでしょう？住むひといるあるへー」

「いや、ないけど」

「なりづちにいなよー！」

おや、これはラッキーだ、こんなにも早く住む場所が見つかるとは。ボクは巫女口りの頭から手を退ける。

「それじゃあ、お願ひできるかな」

「うん……」

満面の笑みで頷く巫女口リ、ボクはそんな巫女口リの笑顔を見ながら叫ぶ。

「ボクの名前は山撫椿、君は？」
「はぐれいれいむだよー。」

嬉しそうに笑う巫女口リの頭を再び撫で、ボクはしばりくの間、そのまままでいた。

夜、夕飯を食べすぐに寝てしまつた靈夢をボクが寝ていた布団に寝かせ、ボクは家、人者の中を歩いていた。ある物を探して。居間の襖を開け、その奥の襖を開け、見つけた。

「やつぱり、な」

その部屋には何もなく、あるのは奥に静かに置かれた仏壇、その中には優しい笑みを浮かべた綺麗な女性の写真があった。ボクはその仏壇の前に座り、しばりべ[写]真を見つめる。

「…………はじめまして、ボクは山撫椿と言います」

まずは自己紹介、人付き合いで一番大切な事は第一印象だと本に書いてあった、気がする。そのまま、じつと[写]真を見つめて続ける。

「ボクはここにで言つ外の住人です。ここでは、ボクは嫌われ者でした。親でさえ、ボクを避け、嫌っていました」

「でも、口に来る前、一人だけ、ボクが好きだと、愛していると言つてくれた人がいました。それが凄くうれしくて、不覚にも泣いてしまいそうになつてしましました」

「あの子は、ボクと同じ感じがする。もちろん、ボクとは違つて明るいし、可愛くてイイ子だ。でも、一人だ。明るく見えてもそれは偽りの仮面、本当は寂しくて辛くて泣きたいんだと思うんです。だ

から、あつて間もないボクを簡単に受け入れる、一人が嫌だから

「だから、誠に勝手ながら、ボクはあの子の兄になろうと思います。勝手だとは思いますが、コレがボクの本質だから。勝手にあの子の兄になつて、勝手にあの子に友達を作らせます」

「では、そろそろボクは寝ます。おやすみなさい」

「ありがとう、お兄ちゃん
(ありがとう、頑張ってね、お兄さん)

「ハイ」

嫌われ主人公と巫女ロリ（後書き）

以上です。

コレで最後です、あ、終わりではないですよ？

次の更新はいつだらう、とりあえず、もう一つの方の更新をすすめまーす。

では、また今度。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4816o/>

嫌われ主人公の幸せ探し

2010年10月30日23時45分発行